

## 「我が国への輸入そばの現況から見る最近の動向と特徴」

江戸ソバリエ、江戸（旧寺方）蕎麦研究会

代表 小島末夫

### 目次

はじめに

#### 1. 2024年の我が国への輸入そばを巡る概況

- 1) 中米ロ主要3カ国からの輸入動態
- 2) 注目されるカザフスタン・ブラジル両国からの輸入状況
  - ①対カザフスタン玄そば輸入
  - ②対ブラジル玄そば輸入

#### 2. 海外のそば市場における最近の取引傾向

～際立つ中国によるロシア産玄そばの爆買い～

- 1) 3年連続で大豊作となったロシア
- 2) 作付面積が減少を辿る中国

#### 3. 世界の主なそば生産国と国別生産量

結びに代えて

はじめに

月日の経つのは早いもので丁度一年ほど前になりますが、我が国の玄そばを巡る内外動向について取りまとめたものを、当協会への寄稿レポートで紹介させていただきました。

年が改まり、新たに昨2024年来の年間数値を示す貿易統計が先ごろ公表されましたので、これを機に直近での我が国への輸入そばに関わる現況につき、以下では特記すべき事項などを中心に述べてみたいと思います。

既にご存じのことも多くあろうかとは存じますが、何か一つでも皆さまのご参考になれば幸いです。

#### 1. 2024年の我が国への輸入そばを巡る概況

##### 1) 中米ロ主要3カ国からの輸入動態

ご承知のとおり、我が国に輸入される「そばの実」は、中国、アメリカ及びロシアの主要3カ国でほとんどが占められております。なかでも、中国産とアメリカ産が輸入量全体の大半を占め、輸入物の大体9割前後はこれらトップ3の国々によって供給されていると言われます。ちなみに、「そばの実」は2010年以降、全体として形状的には、殻の付いた「玄そば」(HS1008.10-090)と、そば殻を取り除いた「抜き実(又はむき実)―その他の加工穀

物（そばのもの）」(HS1104.29-310) のものと、2種類が輸入されています。

表1：日本の主要相手国別輸入そばの推移（2018～24年）

(単位：トン、%)

年	中国				アメリカ				ロシア				世界			
	玄そば	前年比	抜き実	前年比	玄そば	前年比	抜き実	前年比	玄そば	前年比	抜き実	前年比	玄そば	前年比	抜き実	前年比
2018	25,213	5.0	37,946	△2.8	16,592	△8.4	2	-	8,345	18.0	1,345	9.3倍	54,070	3.8	39,301	0.3
2019	18,877	△25.1	39,295	3.6	16,847	1.5	0	-	8,863	6.2	1,378	2.5	46,785	△13.5	40,683	3.5
2020	10,682	△43.4	29,476	△25.0	12,752	△24.3	2	-	5,248	△40.8	0	-	31,784	△32.1	29,483	△27.5
2021	5,028	△52.9	34,311	16.4	11,721	△8.1	0	-	8,035	53.1	2,210	-	28,165	△11.4	36,564	24.0
2022	6,136	22.0	35,961	4.8	12,905	10.1	0	-	8,147	1.4	830	△62.5	31,325	11.2	36,798	0.6
2023	8,879	44.7	39,653	10.3	12,012	△6.9	0	-	6,552	△19.6	3,160	3.8倍	35,480	13.3	42,815	16.4
2024	7,308	△17.7	32,096	△19.1	18,590	54.8	3	-	2,837	△56.7	540	△82.9	34,381	△3.1	33,700	△21.3

出所：財務省貿易統計を基に筆者作成

具体的にまず表 1 より、我が国の主要相手国別輸入そばの推移を見ていくと、コロナ禍前の 2018, 19 年を含む過去 7 年間（2018～24 年）にわたる通関実績では、近年の海外から輸入されるそばの総量（玄そば+抜き実<注：玄そば換算前の生データ>）は、合計で概ね 7～8 万トン程度（国産のそれは 4 万トン程度）に上っています。そのうち、玄そばに替わって殻を取り除いた抜き実の状態に加工して輸入される割合が、一段と増えてきたことが大きな特徴として挙げられます。特にコロナ以後においては、そのような動きが顕著に見られます（ただ、2024 年の場合は両者がほぼ均等な割合）。何故ならば、抜き実は殻が付いていないためそば粉など最終製品に加工する際の作業効率が良く、またそば殻を取り除く処分費用がかからないこともあって、玄そばの形より多く輸入されているのです。

これら外国産の現下の内訳については、直近 3 カ年の平均で見ると、輸入物の大体 6 割強が中国産であり、次いで北米（アメリカ）産が 2 割前後、ロシア産が 1 割強のシェアをそれぞれ占めていると思われます。

それでは、前置きはこれぐらいにして肝心の 2024 年における我が国への輸入そばの状況に関して、以下に詳しく説明いたします。

総論として、2024 年には全国で 12 カ国を原産国とする「そばの実」が各国から輸入されました。すなわち、玄そばの輸入上位順に列挙すれば、アメリカを筆頭に、中国、ロシア、ブラジル、カザフスタン、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア、モンゴル、ブータン、ポーランド、エストニア等々。文字通り世界各地の様々な生産国からの輸入で構成されていることが理解できます。

この我が国全体における「そばの実」の 2024 年の輸入数量は、単純合計の総量で相互に比較してみると、対前年比 13.1%減の 68,081 トン（うち玄そば 34,381 トン、抜き実 33,700 トン）に止まったほか、同輸入金額の方は合わせて 91 億 7,650 万円（うち玄そば 53 億 7,684 万円、抜き実 37 億 9,966 万円）と同 16.5%減でした。これから明らかなように、その結果、近年では稀にみる大幅な増加を遂げた 2023 年の輸入実績と比べれば、数量・金額ともいわずれも大きく減少するに至りました。とりわけ際立っていたのが、コロナ蔓延の影響をまろに受けた 2020 年以来という、抜き実の大幅な減少です。併せてコロナ以前の 2019 年の実績と 2024 年を比較しても、過去 5 年間に全国では玄そばの輸入数量が 2019 年の 46,785 トン

ンから 36%余りも低下している一方で、抜き実のそれについても 2019 年の 40,683 トンから同じく約 17%減と下落している状態にあります（表 1 参照）。

ここで主要相手国別に 2024 年の輸入動向をもう少し詳細に捉えるため、表 1 から改めて輸入通関実績を辿ってみると、下記のような諸点が特徴として挙げられます。

\*数量・金額の両面で中国が第 1 位、アメリカが第 2 位という輸入実績の国別順位は不動であるほか、依然としてこれら 2 カ国だけで全体の 85%以上もの高いシェアを維持しています。

\*こうした中で中国からのそば輸入では、近年はほぼ一貫して玄そばの比率が大きく減少する傾向にあり、抜き実が主流となってきました。直近の 2024 年についても同様に、玄そば・抜き実とも前年実績を大幅に下回りながら、抜き実の輸入割合が圧倒的に高い点は変わっていないばかりか、玄そばの 4 倍以上に上る大量の抜き実が引き続き通関されています（注：中国 1 カ国から抜き実全体の 95%とほぼ全量を同国輸入に依存）。一般的に中国からのそば輸入が多い要因としては、生産量が最大のロシアに次いで高く、品質が比較的安定していること、距離の近接性で輸送日数が短くて済むこと、そのため価格的にも相対的に安値であること、などが指摘されます。

\*アメリカからのそば輸入では、抜き実の形としてはあまり実績が無くて皆無に等しい半面、玄そばの方は我が国全体の過半数に上るほど数多く輸入されているのが特に目立っております。その主な理由は、毎年の対日栽培契約に基づく取引であることから品質が高く安定しており、安価なロシア産の出回りにより割高感のあるとはいえ、値段が少々高めでも国産物よりは安いため等です。

\*世界最大の生産国であるロシアからの輸入については、後述するように中国への大量出荷の影響もあり、玄そば・抜き実とも数量的に大幅な落ち込みとなりました。ウクライナへの軍事侵攻という厳しい国際情勢の激変を受けて、ロシアからの直接購入はなお暫くはばかられる状況が続いているため、一部は中国経由で日本へ持ち込まれているものもあると伝えられます。

\*このような状況の下で、価格面に関して近年における輸入単価（日本円、CIF キロ当たり）の趨勢から先に見ていくと、そば粉の原料となる玄そばの大部分を占める中国産（北方・大粒）と北米産（マンカン種・大粒）の輸入物の間で異なった傾向が表れているのが特筆されます。

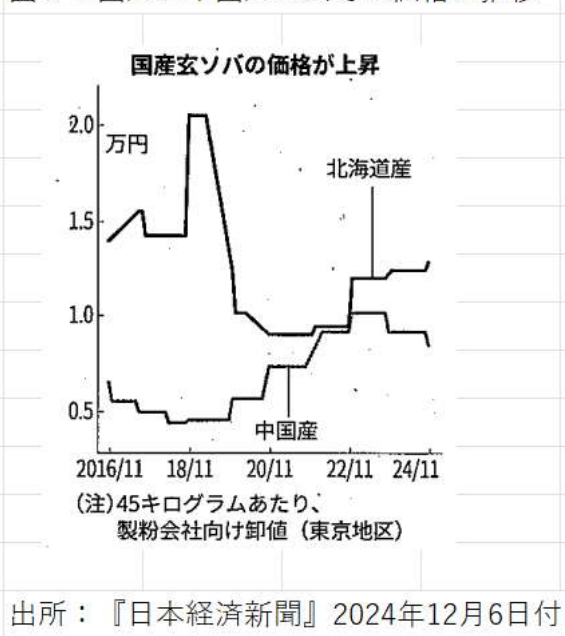
\*実際、中国からの輸入単価は 2024 年産の場合、前年平均の 134 円台より 17%ほど低下してキロ当たり 111 円台にまで落ち込んでいます。これは、2022、23 両年産が主に天候不順などの影響で産地価格が高騰し大きく値上がりしていたものが、2024 年産については自国での供給が減少しているにも拘らず、ロシア産が国内でより多く消費されている模様です。そのため、中国産を我が国に輸出する余地がなおあるとみられ、結果的に対日価格の下落へと繋がったものと考えられます。

\*それに対して、アメリカからの玄そば輸入単価の方はどうかと言えば、中国産の価格下

落とは対照的に、前年のキロ当たり 167 円から 2024 年産では 14%ほど上昇して同 190 円余りの高値を付けていることが分かります。とりわけ、近年における輸入単価の上昇速度は目覚ましく、それを反映する形で 2020 年時点でのキロ当たり 90 円台から過去 5 年間で何と一気に 100 円以上もの急激な値上がりを示している事実は注目に値します。

\*こうした流れを受け、我が国の国内の流通市場における玄そばの問屋卸値（東京、45 キロ、現金、麻袋）では、輸入物（港湾倉庫渡し）のうち中国産の玄そばの取引価格（2024 年もの）についてみると、前年比 8%安の大体 8,500 円前後（キロ当たりだと 188 円程度）が中心となっています。従前の年平均価格の推移を辿ると、例えば 2021 年産の 1 俵（45 キロ）当たり 9,000~9,500 円の水準を経て、データを遡れる 1997 年以降において最高値を付けていた頃に該当する 2022 年産の同 9,500~11,000 円から、翌 2023 年産には同 9,000~9,500 円に値下がりし、さらに 2024 年産は上記のとおり同 7,500~9,500 円へと落ち込んでいることがうかがわれます（図 1 参照）。

図 1：国産と中国産の玄そば価格の推移



\*一方の北米産の卸値に関しては、2022 年産の 1 俵当たり 9,750 円前後→2023 年産の同 1 万 1,500 円前後（比較可能な 2008 年以降では最高水準）→2024 年産の平均 1 万 500 円前後（すなわち、同 10,000~11,000 円の相場。キロ当たりで 233 円程度）と高止まりし、直近では前年のレベルを少し下回るような金額で取引されていることが分かります。

\*なお、国産物（工場持ち込み）の方は、国内全体の約 4 割と最大を占める北海道産が、2024 年産ものについては前年の不作による影響から新物への引き合いが大きくなっていることもあり、製粉会社向けの卸値は 1 俵当たり 1 万 2,850 円前後（すなわち、同 11,500~14,200 円の相場。キロ当たりで 285 円程度）が中心となっている模様です。つまり、前年同期の 2023 年産の価格（1 万 2,500 円前後）と比べれば、3%ほどの高値で取引が始まった

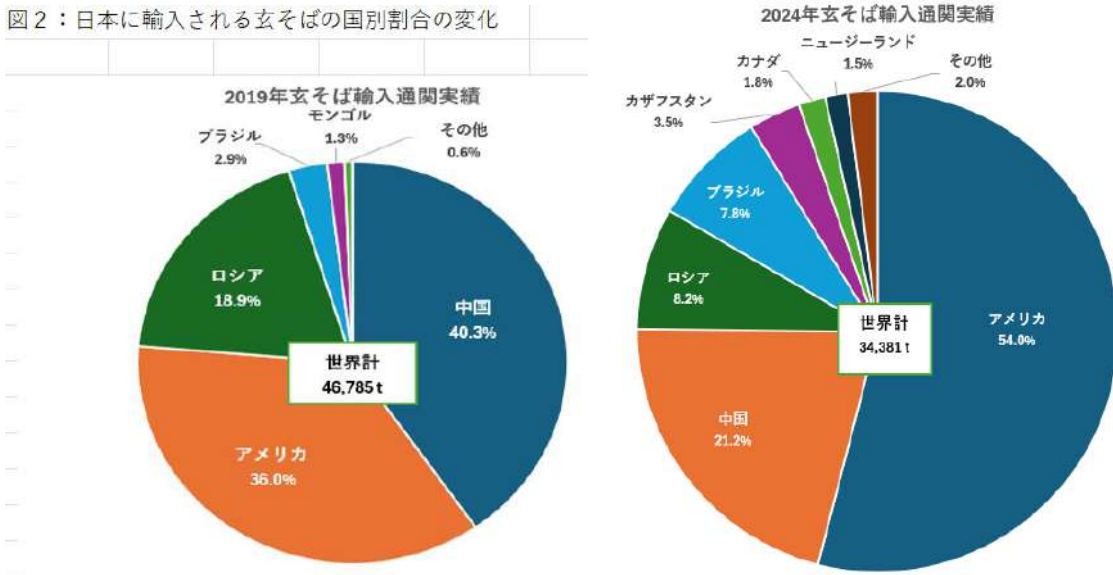
とのことです（図1参照）。

\*ご参考までにこれらを総合的に横並びで比較しつつ整理してみますと、例えば2024年12月27日時点での国内の玄そば相場（東京、円）は、北海道産がキロ当たり単価256～316円であったのに対して、北米産は同222～244円、中国産は167～211円の水準となっております。

## 2) 注目されるカザフスタン・ブラジル両国からの輸入状況

上で見た中米口の主要相手3カ国以外においては、その他の国で新たな購入先の対象としていま注目を集めているのが、主にカザフスタンとブラジルの2カ国になります。事実、近年におけるこれら両国からの玄そば輸入は、比率的にも徐々に高まってきている様子が見られます。図2で示したように、我が国に輸入される玄そばの国別割合の暦年変化（2019年→2024年）を振り返ってみると、それは明らかです。具体例で示すならば、今から6年前にあたるコロナ以前の2019年段階では、中米口の主要国以外に主な輸入相手国として列挙されていたのは、ブラジルとモンゴルの2カ国だけでした。しかしながら、その後の2024年にはモンゴルが主な輸入先リストより外れて国別割合第9位に沈み、替わってカザフスタンが同第5位にランクされるほど躍進し、同国からの玄そば輸入が急激に増加して目立ってきているのです。こうして2024年の我が国への国別玄そば輸入通関実績によれば、ブラジルとカザフスタン両国の占める割合が合わせて11%強（前年の2023年の場合は約20%）にまで達しています。

図2：日本に輸入される玄そばの国別割合の変化



そのためここでは、特にカザフスタンとブラジル両国に焦点を絞りながら、以下に最近の動きを交え紹介したいと思います。

### ①対カザフスタン玄そば輸入

従前の輸入通関実績を遡ってみると、我が国がカザフスタンから初めて玄そばを輸入したのは2022年のことでした。つまり、同国が我が国への新規の供給先に浮上したのは、ごく最近のことなのです。同年にはテストケースのような形で玄そば273トンほどが輸入されました。だが、その翌2023年になると、前年より一挙に急増し何と11倍余りも多い3,127トン（国別割合で第5位のシェア8.8%）が通関されるに至ったのです。この数字だけを聞いても、あるいはピンと来ないかもしれません。その数量が一体どれくらいの規模を指すかと言うと、我が国の都道府県別収穫量とそれを照らし合わせてみればよく分かります。例えば、2023年産そば（乾燥子実）の全国レベルでは、最大の北海道に次いで多い第2位に該当する茨城県の年間収穫量（3,050トン、約9%）にさえ匹敵するほどの数量なのです。

さらに加えて、続く2024年においても前年と同様に、主要3カ国以外のうち、ブラジルに次ぐ依然として第5位にランクされており。ただ、玄そばの輸入通関実績それ自体としては、上述したとおり1,229トン（シェア3.5%）へと減少したものの、同年にはそのほか抜き実の形でロシアを上回る数量の1,052トン（玄そば換算では約1,400トン）が別途輸入されている点にも目を向ける必要があります。

このように、カザフスタンからの玄そば輸入が一気に急増した要因とは何なのでしょう。そうした背景には、我が国で高温障害やゲリラ豪雨等の天候被害が拡大する昨今、そば原料の安定確保と供給が急務とされているところから、リスク分散を図る意味もあって既存の主要輸入相手国をより広範囲に広げつつあったことが指摘できます。つまり、それらに替わる代替国の候補の一つとして、同国が実は数年前から検討されていた事実があります。と申しますのは、これまで輸入そばは繰り返しになりますが、上記のとおりほとんどが中国産とアメリカ産で賄われてきました。ところが、前者については、そばの栽培が主に他の経済作物への転作やロシア産の大量流入に伴う国内作付け意欲の減退などにより、生産が減少を余儀なくされている現状にあります。また後者の方も、最近の物価上昇や為替問題などにより段々と高値になってきているため、両国以外に輸入そばの新たな供給先を探し求めていたと言われます。具体的には2022年頃にカザフスタン産の玄そばを実際に入手し、製粉や試作を重ねた結果、品質的にそれほど問題の無いことが確認されたのを受け、上述した如く2023年になって大幅な輸入増大が実現したという経緯があるわけです。その上で、2024年夏には有志の同業者の間でグループが結成され、現地へ視察団まで派遣されておられます。

以下では、同視察団に加わって参加された池田製粉株式会社がまとめられた、<カザフスタン視察レポート>（『池粉ニュース』第32号、発行：2024年秋）に主として基づき、カザフスタンのそば最新事情についてご報告します。

まずは、資源大国であって中央アジア5カ国の盟主とも目されるカザフスタン共和国の基礎データから捉えていくと、次のようになります。

首都：アスタナ（2017年に万博開催）

面積：272 万km<sup>2</sup>（日本の 7 倍で世界第 9 位の国土。旧ソ連ではロシアに次ぐ）

人口：約 2,000 万人（日本の 6.5 分の 1 弱）

産業：石油・天然ガス・ウランなどエネルギーや鉱物資源関連が中核（特にウランの生産量は世界 1 位）。農業では、最も収穫量の多い穀物が小麦であり、牧畜業も盛ん。

一方、同国のそば生産量に関しては年間約 10 万トン（日本は 3～4 万トン）とされ、そのうち自国消費のほか、一部は主にウクライナ、ヨーロッパなどへ輸出されているとの話です。なお、国際連合食糧農業機関（FAO）の統計資料によると、2023 年の生産実績では 8 万 3,000 トン（ちなみに、日本の場合は 3 万 6,000 トン）との記載があり、後で触れるように世界的レベルで見ても同数量は第 5 位にランクされるなど、そばが結構作られていて世界有数のそば産地であることを物語っています。また同国の主要なそば産地であるパブロダール（カザフスタン産そばの 7 割を生産）は、その北東部に位置し、世界で最もそばが収穫されているロシア・西シベリア地区のアルタイ地方に隣接しているため、気候もそば栽培に適しているのだと言われます。

さらに品種については、カザフスタンの在来品種で作られているのですが、既に我が国の品種をも播種して試してくれているとか。また栽培期間は北海道とほぼ同じで、6 月に播種、9 月に収穫となっています。この収穫のやり方としてはアメリカと同様、コンバインで茎の下部を刈り取り、そのまま茎の上に倒して天日にて乾燥させる、いわゆる「刈り倒し方式」が伝統的に採用されているとのこと。最後の工程である精選工場においては、使用している機械が思ったより新しく、精選（クリーニング）、脱皮、焙煎が行われており、衛生面や水分調整もしっかりと管理されていて、中国国内の良質な玄そばや抜き実と比べても遜色のない品種であったそうです。

こうして以上のような点を踏まえ、今回の視察を通じた最終評価（池田製粉<株>）としては、圃場の管理面で輪作体系（小麦、大麦、豆、芋、ヒマワリなど）が確立されそばの生産にも慣れていること、無施肥無農薬であるため安全性がかなり高いこと、極めて広大な土地で増産ポテンシャルもあること等々、総じて高評価が得られ問題ないレベルに達しているものと判断されたようです。従いまして、同社を含め業界全体としても、これからどう取り扱っていくことになるのか、今後の対応ぶりが非常に注目されるようです。

## ②対ブラジル玄そば輸入

過去 10 年以上にわたり、主要 3 カ国を除き主な輸入相手国としての立場を守り続けてきているのがブラジルです。なかでも特に強調されるべき点は、同国が長い間、一貫して中米ロに次ぐ国別第 4 位の座をしっかりと維持してきたことでもあります。

実際、我が国への玄そば輸入通関実績を遡ってみると、2010 年当時の年間 406 トン程度から、10 年後の 2020 年時点では一挙に 2,600 トンへと拡大しています（注：輸入シェアはいずれも国別 4 位）。しかも、近年にあっては概ね 3,000 トン前後の玄そばが同国より輸入（直近の 2024 年実績は 2,708 トン、国別シェア 7.8%で第 4 位）されており、数量的に最近かなり増えてきたことがうかがわれます。これからも明らかなように、ブラジル産は我が



国市場において今日でも一定の比重を占めているのです。

ところで、ブラジルは言うまでもなく南半球に属する我が国にも馴染み深い国ですが、南半球で我が国への主な玄そば供給国と言え、同国以外にも大洋州のオーストラリア、ニュージーランドなどが指摘できます。かつては、我が国が戦後初めて外国産の玄そばを遠路はるばる調達した供給元も、実は南半球に属する南アフリカなのでした。

とはいえ、ブラジル産の玄そばに対する評判は、これまで必ずしも芳しいものとは言えませんでした。何故ならば、従前から「品質は良いとは言えないけれど値段が安い」というので定評があり、それがむしろ売りだったことに因ります。つまり、中国産やロシア産を使うのはどうもといった所が、そうかといってアメリカ産のは高いため、その際にブラジル産が代替品として選択されてきたわけです。

だが、ブラジルでは同国内で認可されている除草剤などが使用されていて、我が国と比べその基準値が高いことから、輸入時における農薬などのモニタリング検査で引っかかる恐れが出てきています。このように以前から農薬問題が燻っていたものの、従来は我が国への輸入数量があまり多くないこともあり、それほど大きな問題にはなっていませんでした。しかし、上述したとおり近年は輸入数量がかなり増えてきたので、それに伴いモニタリング検査の頻度も多くなり、問題が顕在化するのではないかと不安がられているのです。

加えて、これまで割と安価だった同国産の玄そばも、最近は値段が少しずつ高くなってきたようで、以前より契約しづらくなったとの声も聞かれます。このため、同国産に対するそば需要が今後落ち込んで萎んでいくことになるのかどうか、その成り行きが注目されます。

## 2. 海外のそば市場における最近の取引傾向

### ～際立つ中国によるロシア産玄そばの爆買い～

ここで我が国の国内市場から離れ海外に目を転じると、世界のそば輸出入貿易では、直近の2024年にとりわけ顕著な動きをみせ耳目を引いた出来事が、前年から続く中国によるロシア産玄そばの急激な輸入拡大であります。それは恰も、我が国でひと頃大流行した中国人観光客による大量消費、いわゆる“爆買い”にも似た現象と形容できるほどのものです。

以下、こうしていま世界中から注目を集めている状況を中心に、最近の中露（ロ）間のそば貿易取引で目立っている動きについて、次に詳しく見ていきたいと思います。

まずは表2をご覧ください。これは、中国がロシアから輸入した玄そばの過去7年間(2018～24年)にわたる取引の推移と価格の変動を示しています。まさに一目瞭然なのですが、同表の中で特に際立っているのが、直近の2023、24年に連続して過去にも前例の無いような大量の玄そばが通関されて、同輸入量が一気に急上昇したことです。具体的に見ると、2023年に輸入量が前年実績を8倍近くも上回る年間12万トン余り（月間当たりでは1万トン・ペース）へ急増した後、翌2024年には更に一段と増勢を強め年間22万トン余り（月間当たり2万トン弱）へと達し、史上最高の記録を打ち立てていることが読み取れます。こ



の 22 万トンという数値が一体どれくらいの分量に相当するかと言いますと、ロシアでの 2023 年の玄そば収穫量が約 115 万トンと報告されているので、その 2 割弱にも上る数量が 1 年の間に中国市場へどっと流れ込んだ勘定となります。それはまた、我が国の生産量と比較して捉えるならば、実に 5 年分以上の総量にも匹敵するくらい膨大な量になるわけです。まさに驚異的な輸入数量だと言っても過言ではありません。

表 2：中国の対ロシア玄そば輸入の推移（2018～24年）

年	輸入数量 (トン)	前年比 (%)	トン当たり単価 (人民元)	前年比 (%)
2018	27,365	244倍	1,666	△18.7
2019	36,505	33.4	1,842	10.6
2020	3,189	△91.3	2,264	22.9
2021	27,528	8.6倍	3,643	60.9
2022	15,926	△42.2	3,624	△0.5
2023	124,101	7.8倍	3,176	△12.4
2024	221,764	1.8倍	2,358	△25.8

資料：上新貿易㈱提供

反面、そうした大量取引に伴う価格の方はどう動いてきたのでしょうか。先の表 2 を見ると明らかなように、ロシアによるウクライナ軍事侵攻のあった 2022 年以降、中国でのロシア産玄そばのトン当たり輸入単価（人民元）は、急速に落ち込んでいることが分かります。つまり、中ロ貿易における人民元決裁が広がる中で、同輸入単価は 2021、22 年頃のトン当たり約 3,600 元をピークに急減しているのです。実際、2022 年のトン当たり 3,624 元（円貨換算のキロ当たり単価では約 70 円）から 2024 年には同 2,358 元（同約 50 円）へと 35% ほど値下がりしました（とはいえ、コロナ以前の水準よりはなお高め）。過去 3 年間に於いて輸入数量の約 14 倍増という大幅な拡大とは反比例する形で、価格的には逆に大幅な低下を余儀なくされているのです。いずれにせよ、前節の我が国市場での価格に関する項で述べたことを改めて想起していただければ、その値段が如何に安価なものであるかよく理解してもらえると存じます。

それでは、中国市場におけるそうしたロシア産玄そばの大量の出回りをもたらした背景とその影響について、ロシア、中国双方での産地情報をも踏まえ、それぞれ国内の需給事情から考えていくと次のようになります。

#### 1) 3 年連続で大豊作となったロシア

供給（出荷）元のロシア国内では、そばの収穫高が 2022～24 年の間、3 年連続で大豊作を記録しました。ロシア連邦統計局から公表された速報値によると、ロシア全体における玄

そばの収穫量は、2020年 約89万トン→2022年 約122万トン、2023年 約148万トン（注：その後に更新されたか、FAOSTATによれば約115万トン）を経て、2024年には約111万トンへと推移しております。このように近年は各年とも、例年の通常レベルである100万トン程度の水準を大きく上回っていることが分かります。

例えば2024年の場合で見ると、記録的な播種面積と収穫量を上げた2023年産よりは減少しているものの、それぞれ約109万2,200ha（前年比15%減。うち主産地のアルタイ地方は約61万1,800ha）及び約111万トンの規模に上ると暫定予測されています（資料：<株>新糧提供）。ちなみに、ロシア国内におけるそばの年間消費量は、我が国の7～8倍にも相当する概ね90万トン程度とされていますので、十分に輸出余力があることを証明していると言えます。

こうした中で、ロシアから中国への輸出量は、2022年初めのウクライナへの軍事侵攻以来、中国以外に行き場の少なくなったロシア産玄そばに対して中国からの引き合いが強くなった結果、上記のとおり過去最高を成し遂げるほどの大幅な伸びになっているのです。つまり、中国側からの需要の高まりとともに、一時は供給不安も心配されていたロシア側の生産増加に伴う輸出余力の拡大と価格低下が、その背景にあるわけです。ただ、ロシア現地の生産者には低価格を強いられているような動きもみられるとかで、これから生産調整が入って一部で値上がりに繋がるのではないかといった情報もあるようです。

従って、今はまだ豊作状態が傾向的に続いているため安定しているとはいえ、ひとたびロシアが不作に陥ったら大変なことになるのではと不安視されているところです。

なお、2024年11月にロシアのそば輸出関税が5%から7%に引き上げられました。2025年に入ると再び同関税が改訂される見通しとのことでしたが、現時点では詳細は不明です。

## 2) 作付面積が減少を辿る中国

他方、需要（入荷）サイドの中国における状況は一体どうなっているのでしょうか。

上述したように、依然として我が国への最大の供給先である中国では昨今、そばの栽培よりも収益性の高い他の経済作物が優先されていて、それへの転作から同作付面積が年々低下する減少傾向にあります。その主な理由としては、そばを作るより政府補助金対象の大豆やトウモロコシのほか、コーリャン、粟、搾油用のヒマワリなどの換金作物を栽培する方が、高収入を得られる可能性の高いことが挙げられます。端的に申せばそれだけ生産農家にとっては、そばの栽培が、以前にもまして魅力的ではなくなってきたことを如実に反映しているのです。

さらには、最近におけるロシア産玄そばの大量流入で価格も上がりにくい情勢にあることから、国内の播種意欲がかなり減退しているとも伝えられます。このため、競合作物の作付面積が増えている中でそばに関してはどうかと言えば、降雨量が少なく生育不良となった農地などに追加的に播種されているような状況だと言われます。その結果、我が国のある業界筋の話によると、「中国は今やロシアのむき実工場になってしまった」との声さえ聞かれるほどです。

加えて近年来、アメリカとの貿易摩擦が激化する余波を受け、特に今年に入って第 2 期トランプ政権の誕生で米中対立が一層厳しさを増すなか、中国内では従前より対米依存の高かった大豆やトウモロコシなど主要農産物の自国生産を奨励・強化していることも、その遠因の一つに数えられます。

こうして中国は従来、世界の主要なそば輸出国でもあったのですが、近年に至り同輸出货量が急減するのとは対照的に同輸入量が急増し、2019 年には遂に純輸入国へと転落したことが判明しております。事実、その純輸入量については、2019 年当時の 1 万 4,000 トンから、2021 年に 2 万トン、翌 2022 年には 7,000 という規模に達しています（出所：阮蔚「世界と中国の蕎麦事情」2024 年 12 月 9 日、江戸蕎麦研究会での講演用資料）。これには、最近の中国内での健康志向やそば殻枕などに対する需要の高まりが強く影響しているものとみられます。

### 3. 世界の主なそば生産国と国別生産量

一般的には、横並びで国際比較の可能な統計資料として広く利用されているのが、先にも紹介した国際連合食糧農業機関（FAO）の公表している統計データとなります。これは通称、FAOSTAT (<http://faostat.fao.org>) と呼ばれているものです。それを基に世界の主要各国のそば生産量と国別順位について、時系列的に追っていくと表 3 のようにまとめられます。

表 3：世界におけるそばの主な生産国と生産量（国別シェア）の推移（2017～23年）

年	ロシア		中国		ウクライナ		アメリカ		カザフスタン		ブラジル		日本		世界計	
	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア
2017	1,525	50.2	509	16.7	180	5.9	83	2.7	120	3.9	63	2.0	34	1.1	3,036	100
2018	932	47.8	490	25.1	137	7.0	85	4.3	83	4.2	63	3.2	29	1.4	1,946	100
2019	786	45.5	513	29.7	85	4.9	86	4.9	45	2.6	64	3.7	43	2.4	1,724	100
2020	892	49.3	504	27.9	98	5.4	86	4.7	40	2.2	64	3.5	45	2.4	1,806	100
2021	919	49.1	502	26.8	106	5.6	87	4.6	78	4.1	65	3.4	41	2.1	1,869	100
2022	1,222	54.7	506	22.6	148	6.6	87	3.8	90	4.0	64	2.8	40	1.7	2,231	100
2023	1,149	52.1	504	22.8	211	9.5	87	3.9	83	3.7	65	2.9	36	1.6	2,204	100

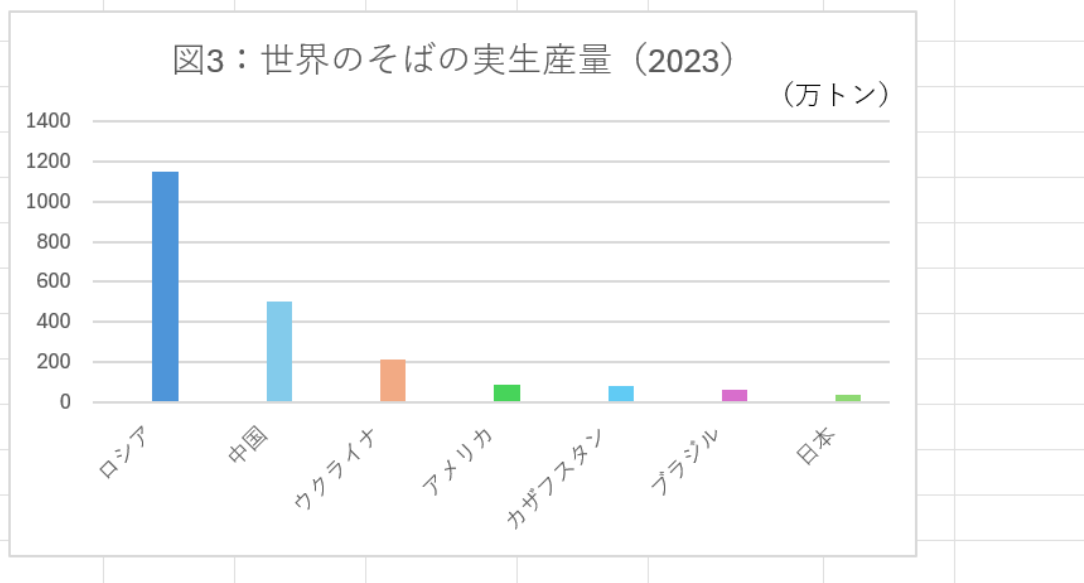
出所：FAOSTAT（一部非公式データを含む。2025年1月30日検索）のデータより筆者作成

今日では世界におけるそばの総生産量は、2023 年に約 220 万トンと推定されており、年によって多少の変動があるものの、ロシアと中国の上位 2 カ国で全体の 75～77%程度が生産されています。なかでも特筆すべき点は、まさにロシア 1 強体制とも言える、同国だけで世界全体の過半数に上る年間生産量（約 115 万トン）を実現していることです。その他では、国別で注視すべきはウクライナの動きかと思われます。戦時下でありながら近年はそば生産が着実に伸びている模様であり、増加の趨勢さえうかがわれます。

現在、最新のデータが入手可能な 2023 年値を事例に、全世界でそばの生産が多い国と同生産量を具体的に列挙すると、次のとおりです（表 3 参照）。

順位	国名	生産量	近年の年平均
1位	ロシア	115万トン	(110~120万トン)
2位	中国	50万トン	(50万トン台)
3位	ウクライナ	21万トン	(10~20万トン)
4位	アメリカ	8.7万トン	(8万トン台)
5位	カザフスタン	8.3万トン	(8~9万トン)
6位	ブラジル	6.5万トン	(6万トン台)
7位	日本	3.6万トン	(3~4万トン)

こうして見ると、我が国も実は、世界で主なそば生産国の一つに数えられるような国である、ということが理解できます。ちなみに、これらの国以外にその他の国で生産量ベスト10に名を連ねている国としては、8位のリトアニア、9位のタンザニア、10位のベラルーシなどが挙げられます。なお、日本を含む上位7カ国のそば生産量に基づく順位を、視覚的に棒グラフで分かりやすく表示したのが図3となります。



出所：FAOSTAT（一部非公式データを含む。2025年1月30日検索）のデータより筆者作成

ここで皆さまのご参考に供すべく、過去における世界のそば生産量の変遷を丹念に古い時代まで遡ってみると、次に示すようなとても興味ある史実が明らかになります。すなわち、1961年以來のFAOSTAT（一部非公式データを含む。2025年1月30日検索）に記載されている総合的な推定値によれば、2010年代以降においては最高の生産水準をあげたのが2017年の年間304万トンでした。しかしながら、過去最高の記録となるとそれを達成したのは今からもう30年以上も昔の1992年に遂げた約498万トンであるのに対して、反対に従前の過去最低の記録ではロシアが大干ばつに見舞われた2010年（同国の生産量は約34万トン）における約145万トンと記されています。

最後になりますが、当該項目で個人的に日頃からこれまで不可解且つ疑問に感じている問題につき付記しておきます。それは何かというと、ヨーロッパにおけるそばの主要生産国であった、フランスとポーランド両国の最近の生産動向に関わる情報です。

こうした点を解明するための拠り所である上記の FAOSTAT を改めて注意深く見直していくと、両国のデータは不思議なことにいずれも 2017 年値を最後に、その後は全く掲載されていないことに気づかされます。つまり、翌 2018 年以降に関する統計データは、ずっと不詳のままの状態が長らく続いているのです。

そこで、最終記載のある 2017 年までの入手可能な 3 カ年 (2015~17 年) の年平均データを念のため試算すると、そば生産量はフランスの場合が年間約 18 万トン (うち 2017 年値は約 26 万トン)、ポーランドのそれが同約 10 万トン (うち同約 11 万トン) にも及んでいることが明らかになります。従いまして、表 3 にこの数値を照らし合わせてみると、世界的レベルで見ても上位にランクされ相当な量になることをいみじくも示していると言えます。

だが、両国の中でポーランドに関しては、一つの有力な手掛かりとなる情報が得られました。すなわち、前にも既にご報告したところですが、去る 2023 年 7 月にポーランド・プワヴィで第 15 回国際そばシンポジウムが開催された際に表明されたのです。主催国であったポーランドの研究者から、同国のそば生産事情について最新の情報提供がありました。それによると、同国の 2021 年におけるそばの作付面積は約 11 万 8,000ha で、同収穫量は何と過去最高の約 18 万トン (注: 以前のピークは 1980 年ごろの約 13 万トン) を記録していたとの解説がなされました。特に 2020 年代に入ってから、同国でそば生産が急激に増加しているようであり、その状況の一端が明らかとなったのです。

いずれにせよ、そうした関連資料なり情報などご教示いただける方がおられましたら、是非ともご一報ください。お待ちしておりますので、どうか宜しくお願い致します。

結びに代えて

以上で見たように、本稿では我が国への国別輸入通関実績に基づき、主として海外からの輸入そばに関わる現況とその特徴についてお伝えして参りました。今後とも引き続き、我が国を含む世界のそば事情や生産・流通状況などに関して、更に探求していく所存です。

聞くところでは、来年の 2026 年 9 月に中国・四川省で次回の国際そばシンポジウムの開催が決定しているそうです。その前に、今年は 9 月初めに地域ごとの同シンポジウムの先駆けとしての会合が、ヨーロッパのハンガリーで開催されるとのことでもあります。

こうした世界中の研究者や実務者などが一堂に会する機会に合わせ、是非とも上で挙げたような疑問も含め活発な議論が進み、これまで不明な事柄が一つでも解明されていくことを願い、大いに期待したいと思います。

(2025 年 4 月 3 日記)